



TITLE:

スマトラの村の20世紀--地域の歴史を描く (特集 地域研究の新地平)

AUTHOR(S):

加藤, 剛

CITATION:

加藤, 剛. スマトラの村の20世紀--地域の歴史を描く (特集 地域研究の新地平). アジア・アフリカ地域研究 2001, 1: 37-53

ISSUE DATE:

2001-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/79981>

RIGHT:

特集・地域研究の新地平

スマトラの村の20世紀

——地域の歴史を描く——

加 藤 剛*

Experiences of the Twentieth Century:
Writing a Local History of a Sumatran Village in Indonesia

KATO Tsuyoshi*

For the last sixteen years, I have been carrying out a longitudinal fieldwork at a Minangkabau community, which mainly relies on rice cultivation and rubber tapping for livelihood, in the Kuantan area of the province of Riau, Indonesia. Starting in late 1984, I have visited Koto Dalam (pseudonym) practically every year, sometimes for one and a half months at any given visit but oftentimes for a shorter stay. The research project, if it can be called that, has haphazardly and gradually taken its present form despite the facade of pre-meditation and good planning.

Koto Dalam has a current population of about 3200 and consists of seven administrative villages. I have spent a total of over eleven months in the community from 1984 to the end of 2000. Tentatively, the fieldwork is expected to be continued until 2003 so that I will be able to observe and follow, as a more or less contemporary and *in situ* eye-witness, social changes in Koto Dalam over the twenty years during the turn of the century and at the same time conduct an oral-history-type research, above all, among village elders, in order to reconstruct a social history of the community which aims to cover the greater part of the twentieth century. In this attempt, it is my intention to always contextualize the community in the wider and multi-layered circles of "areas" such as Kuantan, Riau, Sumatra, Indonesia, and the world rubber market, and to understand Koto Dalam's social processes in its shifting interconnectedness with these areas. It is proposed that longitudinal fieldwork is an important method in area studies, given the rapid and often drastic social changes now experienced by developing countries as well as developed countries.

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University

1. 20 世紀という時代

わたしたちが生きてきた20世紀、わたしたちの両親、さらにはそのまた両親が生きてきた20世紀は一体どんな時代だったのか—これが、研究プロジェクト「スマトラの村の20世紀」における素朴な疑問である。満足のいく答えが見出せるかどうかは別にして、この茫漠とした問いかけにはいろいろな形で取り組むことが可能であろう。

わたしの場合、インドネシアはスマトラ島のひとつの村、コトダラム (Koto Dalam) と仮名された村が体験した100年ほどの歴史をもとに、この疑問を考えようとしている。それも、1984年から始まり2003年までの20年間、これまでに途中実質3年半ほどの空白があったとはいうものの、コトダラムでフィールドワークを続けながら、つまり定点継続的なフィールドワークをとおして、この疑問を考えようとしている。

どのようなきっかけからこのプロジェクトが生まれたのか、どのような意味が定点継続フィールドワークに存在するのか、そしてプロジェクトのなかで歴史の再構築と地域はどのように考えられているのか、などを記すのが、この小論の目的である。本論に入る前に、簡単にコトダラム村を紹介しておきたい。

2. コトダラム村の概要

コトダラムが位置するのはリアウ (Riau) 州のクアンタン (Kuantan) 地方である。クアンタンは、西スマトラ州のシンカラ (Singkarak) 湖を水源としマラッカ海峡に注ぎ込むクアンタン・インドラギリ (Kuantan-Indragiri) ないしインドラギリと呼ばれる河の中流域に広がる (図1, 2)。リアウの内陸部では昔から河川が主要交通手段とされ、村落も川沿いに展開した。クアンタン地方の村々も例外ではない。1920年代以降、徐々に道路がつくられるにいたるが、リアウで陸上交通が圧倒的に重要になるのは、スハルト大統領時代の1970年代後半以降のことである。ただし、1999年現在、コトダラム村には道路も電気もつうじていない。リアウの州都パカンバル (Pekanbaru) から250キロ南東のパシール (仮名) でバスを降り、小舟で対岸へ渡ると、あとは40分以上歩いて村に到着する。

クアンタンの住民は、主として1980年代以降に移住したジャワ人やバタック人を除き、基本的にミナンカバウ (Minangkabau) である。親族制度も西スマトラのミナンカバウ人と同じく母系制である。西スマトラを故地とするミナンカバウによりクアンタンがいつ頃から殖民されたのか明らかではない。ミナンカバウによるマレー半島のヌグリ・スンビラン (Negeri Sembilan) の殖民が15世紀初頭にはみられ、これら殖民者の西スマトラからの最重要移動経路がクアンタン・インドラギリ河であったろうことを考えると、クアンタンの殖民は14世紀にはすでに始まっていたと推測される。そのなかでコトダラムの開拓は新しく、クアンタン地方内

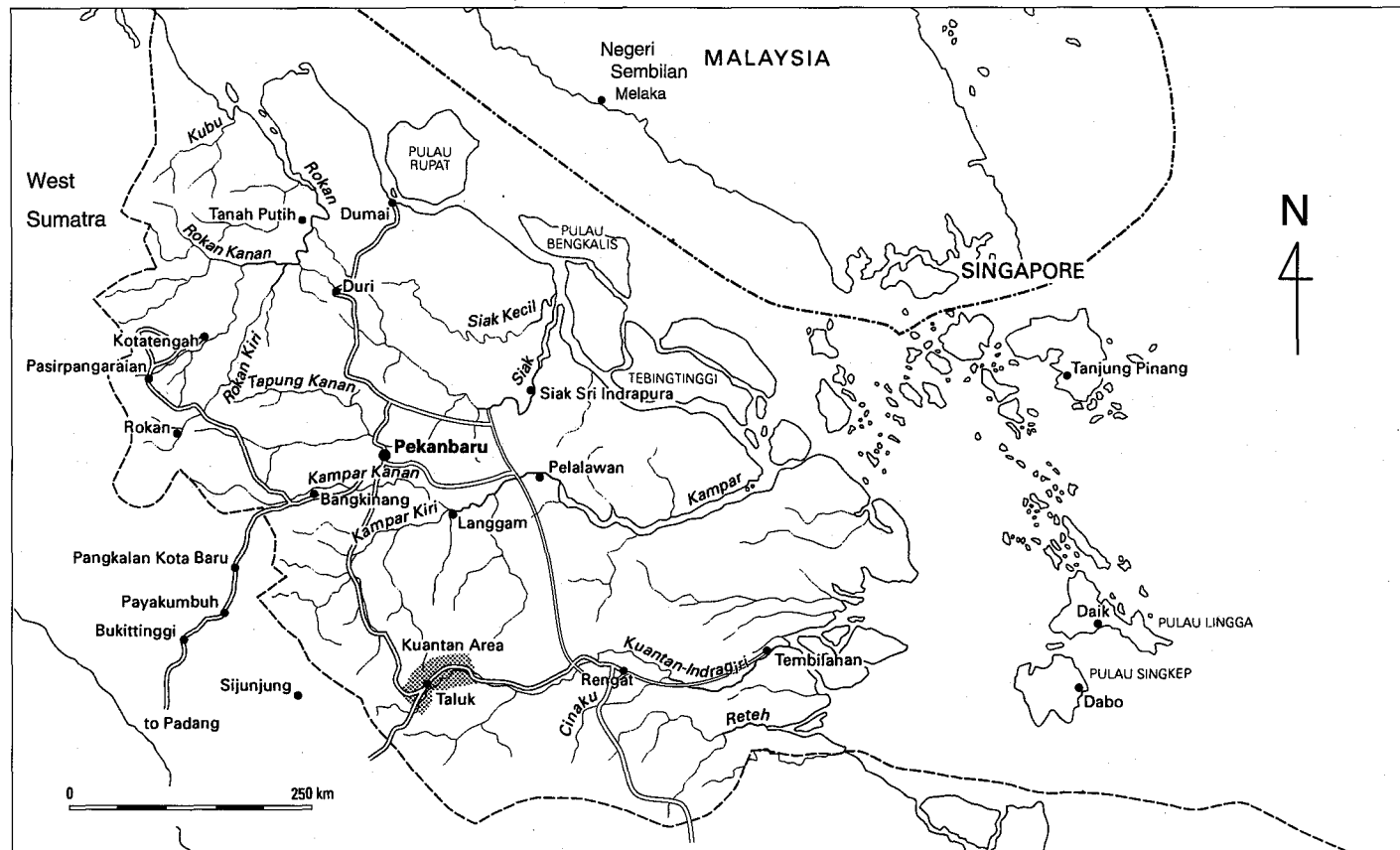


図1 リアウ州とクアンタン地方

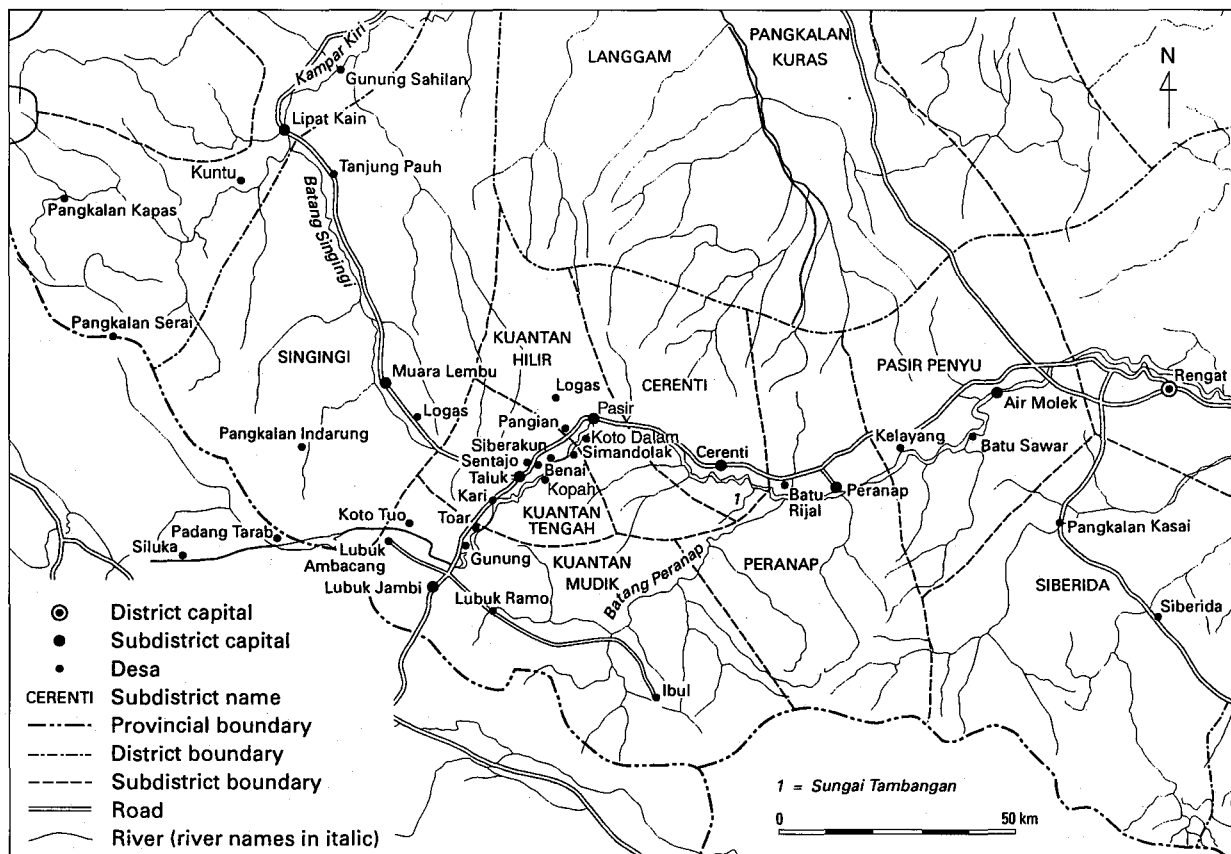


図2 クアantanと近隣地域

の下流域に位置する村の開拓は、おそらく19世紀初頭のことであった。

クアンタンを含む中央スマトラの20世紀は、1901年にこの地域で観察された皆既日食で幕を開けた。コトダラムを居住地とし、呪術的に優れていたとされる貴人ラジャ・アブドゥラが同じ年に死去しており、クアンタン地方で「真昼の闇」(golo tengah hari)として知られる皆既日食は、村ではラジャ・アブドゥラの死と結び付けられ、現在にいたるまで語り伝えられている。

皆既日食から数年後の1905年、インドネシア全域へとオランダ支配が浸透するなか、クアンタン地方も植民地支配に組み込まれた。その後、数年を待たずして、すでにマレー半島で栽培が拡大しつつあったゴム樹がクアンタンにもたらされ、小農ゴム栽培が急速に発展することになる。他方、オランダ支配の確立とともに、クアンタンには複数の地方行政中心地が週市を伴って河沿いに設立され、中国人がこれら行政兼商業中心地に進出するようになった。クアンタン・インドラギリ河下流の港レンガット(Rengat)は、1870年代末にはすでにオランダ支配下にあり、1880年代末までには、この港とシンガポールの間に小型蒸気貨客船が運航していた。レンガットに現存する中国廟に掲げてある額には1893年建立とあり、この時期、すでに多くの中国人がレンガットに渡っていたことが知られる。オランダ支配の内陸への拡大に歩調を合わせるようにして、こうした中国人の一部がクアンタン地方でも活動するようになったと考えられる。

河沿いの自然堤防を居住空間とし、後背湿地における減水期稲栽培と湿地に混在する乾地における天水田稲作を主生業としていたクアンタン経済において、ゴム栽培が圧倒的に重要となるのは1920年代のことであった。ゴム樹は湿地を嫌うため、ゴム栽培は河からやや離れた後背地の森林を伐開して行われた。それまでは森林産物とトラや他の獣のための空間であった森林、とくに集落に近い後背微高地の森林が、ゴム栽培以降は、村人にとって日常的に関係をもつ経済空間となったのである。

森林伐開にあたっては男の労働力が必要とされ、また集落から離れたゴム園でのゴム採取は女に適した仕事ではないということもあってか、ゴム栽培、ゴム採取は男の仕事であった。これに対し、稲作に従事したのはもっぱら女である。つまり現金獲得のための仕事は男のもので、自給自足のための稲作は女の仕事であったことになる。ジェンダーによるこの分業は、現在にいたるまで基本的に変わるところがない。ゴム導入以降、ゴム栽培と減水期の稲作がクアンタン地方における2大生業活動となった。¹⁾

わたしがクアンタン地方において本格的な調査を行ったのは1984年11月から85年1月ま

1) ゴム導入以前のジェンダーによる仕事の分業であるが、稲作に関わる仕事の多くは女によって行われ、森林産物採取、家畜の売買などの現金獲得活動は男が行っていたものと考えられる。もうひとつの現金獲得活動であった砂金採りは、村の年寄りの話を総合すると、男女ともが従事する活動であった。

での2ヶ月半で、その間の約1ヶ月半をコトダラム村で過ごした。その後、3年半の空白ののち、2度目に村を訪れたのは1988年のことである。5日間という短い滞在であった。1990年からは、たとえ滞在期間が短かろうと、毎年、フィールドワークのための訪問を続けている。1回に滞在する期間は最長のもので1ヶ月半、最短は5日から1週間で、1984年の訪問から2000年末時点で、村の総滞在期間は1年を超えてはいない。11ヶ月ほどであろうか。現在の計画では、少なくとも2003年まではフィールドワークを続けるつもりになっている。途中、空白の期間があるとはいうものの、ひとつの村における20年ほどの定点継続フィールドワークをとおして、現在進行形で進む時代の変化をリアルタイムかつ現場で体験・体感するとともに、20世紀というものがどのような時代であったのかを焦らずのんびりと考えていきたい。コトダラム到着時の村人の挨拶が、いつの頃にか「いつ来たの？」から「いつ戻ったの？」に変化したように、フィールドワークのための訪問、研究のための訪問と語るのは、もはやあまり適切とはいえない。村と村人への感情移入が、「帰郷」の大きな理由でもあるからである。感情移入が研究のあり方にどのような影響を与えているのか、これはいずれ自分なりに考えてみたい。

オランダ時代から現在まで、クアンタンといわずリアウについて、特定村落の変容を扱った資料はきわめて数が少ない。コトダラムで過ごす時間は、その多くが年寄りとの昔話や年寄りからの聞き取りに費やされることになる。

3. 偶然の連鎖

研究者に研究歴があるように、研究プロジェクトにも歴史がある。「スマトラの村の20世紀」の場合、そもそもプロジェクトと呼ぶのは面はゆく、不自然でもある。すべては偶然の賜、瓢箪から駒だからである。

わたしのフィールドワーク歴は西スマトラのミナンカバウ社会から始まる。1972年初頭から1973年初夏にかけてのことであった。フィールドでの紆余曲折のあと、ミナンカバウとジャワの間の職業観に関する比較研究という当初のテーマは、あまり現実的ではないとの判断から放棄することになった。最終的には、4つの村での事例研究をもとに、ミナンカバウ社会について有名な2つの特徴、母系親族制度と出稼ぎ・移住慣行形態をめぐって、両者の変容過程を相互に関係付けながら議論する博士論文をまとめた。

その後、再びフィールドに戻ったのは1980年の秋、この時は1年以上にわたってジャカルタ在住ミナンカバウの同郷会の歴史と活動を研究した。1950年代末以降、ミナンカバウはジャカルタへと大量に出稼ぎ・移住をするようになり、1970年代をつうじて同郷会活動が盛んだったからである。

リアウ州における最初のフィールドワークは1982年末のことで、2ヶ月半の間、州の内陸地域を精力的に旅行した。人口的にも物理的にも規模が大きく、捉えどころのない都市の研究の

難しさをジャカルタで経験したのち、再び村落研究に戻ることを決心してのことだった。ただし、研究内容とはいえば、西スマトラの東隣州リアウの民族・生業・生態についての俯瞰図を、旅行をとおして理解したいという漠然としたものだった。²⁾ その経験をもとに、リアウ州のなかでもミナンカバウの影響の強いクアンタンをフィールドワーク地として選び、さらにフィールドワーク期間中の一部をコトダラム村で過ごしたのが、既述のように1984年末から翌年初頭にかけてのことである。

1982年の調査と同じく、この時も明確な調査目的があったわけではない。当時、村レベルにおける衣・食・住を中心とする物質文化の変化、生業活動の変化に関心を抱き始めていたこともあって、聞き取りをとおしてどこまで村の日常生活の変化が再構築できるかに挑戦してみたいと考えていた。研究対象としてコトダラムを選択したことにはさしたる理由はなく、当時昵懇にしていたリアウ大学教授の示唆のままに、この人の出身村でフィールドワークをすることになった。つまり、聞き取りによる歴史構築という方法論的関心が主であり、その実践の場所にはあまりこだわってはいなかった。振り返って、方法論上の観点から非常に幸運だったのは、コトダラムの集落がすべて河の片側に位置し、それも道路の通じていない河岸にまとまっていたことである。クアンタン地方の他村に比べて村としての社会・文化的結束力が強く残っており、外界からの影響も道路が通った村よりも少なかったところから、村の出来事・歴史が人々の記憶のなかにまだ鮮明に息づいていたからである。

日常生活における付き合いにおいて、人と人の間に気が合う合わないがあるように、フィールドワークにおいても合う合わないがある。研究者といえども人間である。フィールドワークで喜怒哀楽を経験するのは勿論のこと、人の好き嫌い、社会との折り合いの良し悪しがある。ただし、研究の必要上、気が合わないからといってフィールドワークにおける人間関係を取捨選択したり、当の研究対象社会から立ち去るわけにはいかない。感情移入ならぬ「感情移出」が研究のあり方にどのような影響を与えるのかも、フィールドワークにおいて内省を迫られる課題のひとつである。

コトダラム訪問以前に行ったフィールドワークにおいて、研究対象社会への適応や人間関係面で問題が皆無であったとはいわない。しかし、とりあえず深刻な問題を経験することはなかった。コトダラムでの体験が異例なのは、1984年から85年にかけての滞在が1ヶ月半と短いものであったにもかかわらず、村および村人との関係が最初からきわめて心地よいものだったことである。村ではリアウ大学教授の紹介で元商人の家に泊めてもらった。60代半ばの夫婦と、40代前半の寡婦の娘、そしてその子供が5人同居という3世代家族の家だった。村では年寄りと雑談をし、20世紀初頭あたりからの村の話を聞いて歩いた。村で会った最高齢者は1901年

2) この成果は、Kato [1984] にまとめられている。

の皆既日食を実見している女性で、推定誕生年が1890年代末である。

その後、1986年にはマレーシアのヌグリ・スンビランの村において3年間の研究プロジェクトが始まり、他方インドネシアでは、1970年代に時間を過ごした西スマトラの村での再調査が計画されていた。現実には、1989年、この村で1ヶ月を過ごしている。

コトダラム再訪の機会は1988年にやってきた。西スマトラのブキティンギで開催された国際会議への出席を利用して、村を訪れることにしたのである。5日間という短い滞在はあっという間に終わったが、それは知的にも感情的にも刺激的な滞在だった。ひとつには、1984年には経済的どん底にあった村が、1988年にはちょっとした好況に沸いていたことである。3年半という時間がもたらした変化に驚くとともに、もう1度だけコトダラムでフィールドワークを行うことに決め、これは1990年に実現した。1ヶ月半の滞在であった。このときでさえ、翌年からは西スマトラの再調査に戻るつもりになっていたが、結局これが実行に移されることはなかった。むしろ、コトダラム訪問がいまだに繰り返されている。

このように、“20年をかけて遂行される「スマトラの村の20世紀」プロジェクト”は、特別な意図と計画に基づいて立ち上げられたプロジェクトではない。偶然の積み重ねの結果として、なんとなく形を整えたものである。頼りない出自にもかかわらず、現在では、定点継続フィールドワークは地域研究のひとつのあり方であろう、と考えている。逆説的ではあるが、「定点継続を行おう」との固い決意の欠如と、そして少なからぬ感情移入が、定点継続フィールドワークには不可欠に思われる。わたしの場合、当初からの寄宿先のティノ（祖母の意）の存在が、感情移入の面で非常に大きい。好きなのである。

4. なぜ定点継続フィールドワークか

ひとつの村の歴史を再構築するとして、それを20年かけて行うことにどのような意義があるのか。20という数字に特別な意味があるわけではない。5年でも、10年でも構わない。毎年ということにも特別な意味はない。2年、3年、4年おき、あるいは不規則な継続でもよいだろう。どのような形であれ、定点継続フィールドワークの意義はなんなのか。偶然の連鎖としてのプロジェクトを振り返るとき、次のようなことを感じる。

この20年ほど、日本人の国際観光が盛んになると時を同じくして、日本人研究者・大学院生が海外でフィールドワークを行う機会が飛躍的に増大した。人類学を例にとると、かつては博士論文のための長期フィールドワークに従事しても、その後再びフィールドワークを行うことは稀であった。旅費が高く、研究助成機関は少なく、第一いつまでも地べたを這いずるような仕事を続けているのは知的にあまり格好がよくなかった。現在は違う。すべての面で社会変化の速度が速く、数年ぶりにフィールドに出かけようものなら今浦島である。また、わたしの研究地域の東南アジアについていえば、日本人にとって、この地域は物理的・心理的に格

段と近い存在となった。いつでも気軽に出かけられる、そういった存在である。そして、なによりも、文部省や諸財団による海外学術研究助成の量と質の拡充、さらには一部の私立大学に広がりつつあるサバティカル（知的充電休暇）制度が、フィールドワークの頻繁化に大きく貢献した。

同じフィールドワークといっても、学生と大学教師・研究員の間では、自ずとそのあり方に違いがある。ひとつは時間の自由ということである。学生時代には1年、2年と長期にフィールドワークに出かけることが可能でも、大学や研究機関に就職したあとではそうはいかない。職務がなかなかそれを許さなくなるだけではない。家庭や家族の存在があり、さらには体力の低下、あるいは便利な生活・贅沢な生活への慣れなどが長期のフィールドワークを困難なものにする。したがって、毎年のように海外に出られるようになった状況下で、大学人にとっての実際のフィールドワーク期間は、1度に長くて3ヶ月、短ければ2、3週間といったことにならざるをえない。

このような環境のなかで、大学人の選択は基本的にふたつある。ひとつは、短期間とはいえ、比較の観点からいろいろな地域・社会を旅して知見を空間的に増やすことである。もうひとつは、なるべく同一地域・社会を繰り返し訪れ、研究対象についての知見を時間的、重層的に蓄積していくことである。一般的な傾向として、生態系の関心が強い研究者は前者の選択を、社会系の関心の強い研究者、とくに研究対象社会の言語の知識が研究成果に大きく影響を与える人類学・社会学の背景をもつ研究者は、後者の選択をするようにみえる。わたしの選択は後者、つまり定点継続フィールドワークであったことになる。念のために付言すれば、2つの選択は必ずしも二者択一の関係にはない。どちらの選択に強調点を置くかである。また、長い研究人生のなかで、なんらかの形で両者を組み合わせることも不可能ではなかろう。事実、わたしも、この十数年間、コトダラムだけでフィールドワークの時間を過ごしてきたわけではない。

東南アジアの社会は、村落社会を含めて、1970年前後を境として急速な経済変化、社会変化を経験するにいたった。ややもすると限界効用逓減の法則に直面しやすい定点継続フィールドワークは、変化の激しい現代という時代にこそ相応しい。コトダラムの例でいえば、自動車道とは反対側の河岸に位置するこの村に、20キロ離れた遠隔地の橋を通して初めて自動車が入ってきたのは1998年のことだった。コトダラムの村落森を取り上げアブラヤシ園を開いた企業が、村人の反企業感情を静めるために、橋から村まで砂利道を通したからである。村と外界を直接繋ぐ定期陸上公共乗物はまだ存在しない。しかし、雨期には不通となる砂利道が舗装されれば、これが登場するのは時間の問題である。電気の導入も、おそらくこの数年のうちには実現するだろう。こうしたことが、村の生活に大きな変化をもたらすのは当然のことで、「スマトラの村の20世紀」では、こうした変化もリアルタイムで追いかけていたいと思っている。

表1 コトダラムの7行政村の人口、1980年と2000年

デサ	面積(km ²)	人口(1980)	人口(2000)
Koto	8.28	820	1163
Banjar Tua	10.97	683	707
Sungai Banyak Ikan	9.67	317	393
Pasir Batu Mandi	9.77	428	344
Tanjung Labuh	10.17	128	124
Kasang Tinggi	8.80	55	305
Teratak Baru	7.88	81	180
合 計	65.54	2512	3216

出典：下クアンタン郡役所

コトダラムが近年経験した大きな変化を示すものに、表1にみられるような行政村間の人口増加の変異がある。コトダラムはかつてナゴリ (nagori) というひとつの慣習村を形成していた。スハルト体制下では地方行政機構の全国的斉一化が図られ、コトダラムもこの流れのなかで、1970年代末にジャワ村落に範をとったデサ (desa) という行政村に7分割された。表1は、7つの行政村の1980年と2000年の人口数を比較したものである。コトダラムの7行政村間における20年間の人口増加の割合には大きな違いがあることがわかる。大幅な人口増加を経験したのは3つのデサで、コト、カサン・ティンギ、トラタック・バルである。残りの4つのデサでは、2つが人口低下を経験し、1つが若干の人口増、残る1つが村としての平均的な人口増を経験している。

表1の変異は、すぐれてコトダラム内の人口移動によって引き起こされたものである。人口増加を経験しなかった、あるいはそれほど経験しなかったデサは、じつは河沿いに位置した古い集落で、後背地には稲作地が控えている (図3)。とくにバンジャール・トゥアは政治・経済・人口面において、かつてはコトダラムの中心的な集落だった。歴史的にももっとも古い集落と考えられる。これに対し、大きな人口増を経験した3つのデサは内陸に位置し、コトを除いてオランダ時代に集落として存在したことはなかった。コトさえも、1920年代の段階で、モスク、集会所、雑貨店などがあっただけであり、一般家屋が建てられるようになったのは1930年代後半である。つまり、自然堤防や稲作地から離れ、ゴム園の展開する内陸寄りに人家が建つようになるのは、この地にゴムが植えられるようになってからのことだったのである。

表1の変化を直接的に招来したのは、1980年から始まった政府援助による古いゴム園の植え替え事業である。高齢化し、ゴム液産出量の落ちたゴム樹に長いこと頼らざるをえなかった村人にとって、1960年代、70年代、ゴム栽培・採取はかつてのような華やかさを失っていた。改良種苗木による再植事業の開始は、人々のゴム栽培への関心を再び呼び覚まし、さらには村人の居住志向にも大きな影響を与えた。また、ゴム採取自体の社会的地位も上昇し、以前であっ

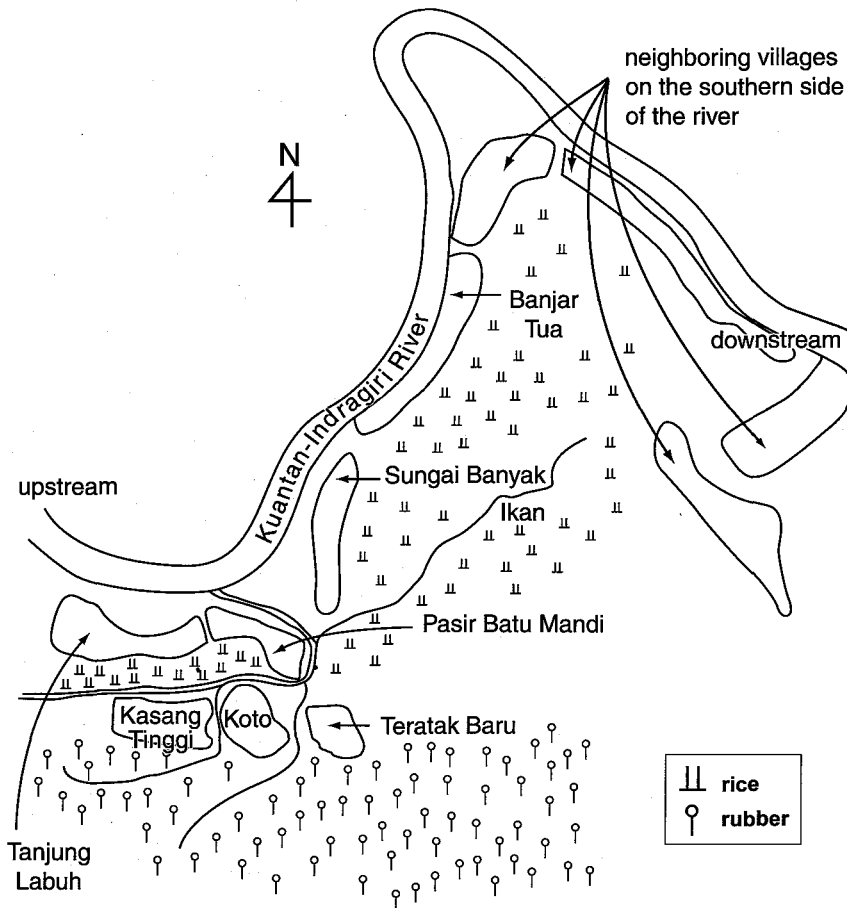


図3 コトダラム村の立地の模式図

たならば村の小学校の教師がゴム園を所有し、自らゴム採取に従事することなど考えられなかったのが、再植以降はこれが珍しいことではなくなった。さらに、1980年代末になると、女性のなかにもゴム採取を始める人が出てくるようになる。ひとつには、1ヘクタール規模の改良種ゴム園でのゴム採取時間は1時間半ほどであり、家事とゴム採取が両立可能となったからである。かつてこれは半日仕事であった。³⁾

3) ゴム採取時間が短縮された要因は複合的である。改良種ゴム園では下生えの刈り取りがよく行われているためゴム園での身動きが楽なこと、1980年代半ば以降のゴム採取はゴム樹の表皮を切るだけで、かつてのように表皮を切ったあと毎日ゴム液を採取するわけではないこと、また女性はゴム園への行き来を夫が運転するオートバイで行うことが多いこと、などが挙げられる。一般に女性が行うゴム採取からの収入は、女性自身のものとなる。

クアンタンといわず、インドネシアあるいは東南アジアにおいて、この30年ほど、開発の掛け声のもとに、政府、NGO、世界銀行など、外のエージェントの働きかけが直接末端社会にまで向けられるようになった。こうした状況下、内と外との作用・反作用の結果として、村落社会は大きく不断に変容している。変化の激しい現代という時代においては、社会変容過程に関する事例研究の蓄積のためだけにとどまらず、変容の方向性を比較考察するためにも、定点継続フィールドワークのもつ意義はきわめて大きいものがあるといえよう。

5. 歴史の再構築ということ

一般に、村などでのフィールドワークに基づく歴史の再構築を試みる場合、特定のフィールドワーク時というひとつの「現在」を起点に時間を後戻りし、過去から現在に向かって歴史を再構築することになる。このような作業のなかで、現在がどれだけ明示的に意識されているかどうかは別にして、現在が歴史の再構築に大きな影響を与えるものだ気がついたのは、1984年と1988年に「みた」ふたつのコトダラム間の乖離に直面したからであった。

1984年にみたコトダラムは、経済的にも精神的にも、どん底の状態にあった。1980年に始まった再植プロジェクト下のゴム園は、まだゴム液を採取できる段階には達しておらず、一方で老齢化し、管理が悪いためにジャングル化した古いゴム園はゴム液の産出量がきわめて低かった。もっとも打撃が大きかったのは、再植されたゴム園がゾウの侵入を受け、多くが壊滅的な被害を受けたことである。ゾウの被害は偶然のなせる業ではなかった。リアウ州さらには南隣のジャンビ州をつうじ、新規プランテーションの開拓とともに小農ゴム園の再植が大々的に行われた結果、生息地や餌場としての森林ならびに古いゴム園を奪われたゾウが集落近くにも出没するようになり、ゴムの苗木や若木を格好の食糧とした結果であった。これに対抗するには、再植ゴム樹が大きく生育するまでの2年から3年間はゴム園に寝泊りし、再植地をゾウの攻撃から守る必要があった。しかし、ゴム導入時の1910年代の生活がどのようなだったかはともかくとして、すでに何十年間も集落での生活が常態となり、それも当時テレビが出始めた集落での夜の生活に慣れた村人が、自発的に2、3年間も集落から離れ、ゴム園で暮らすとは思えなかった。世界市場におけるゴム価が低迷していたことも、事態を助けるものではなかった。

村のもうひとつの経済的柱、稲作はどうかというと、スハルト体制下で始められた2期作がクアンタンにも導入されるのは1970年代後半で、より集中的に取り組まれたのは1982年のことであった。これにより、農地の状況や灌漑施設が2期作に適しているかどうかにかかわりなく、コトダラムの村人も改良種稲を使って2期作を行うように指導された。1984年に訪問した村は、3年続きの不作を経験したばかりだった。

2期作が導入される以前の村では、毎年の稲作開始期は村の呪師によって決定された。星座オリオンの位置関係と占いによって決めるのである。「田に降りる日」が決まると、豊作祈願

のために村全体で儀礼が行われ、そののち田起こしが始まった。つまり、かつての稲作は村共通の年次サイクルのもとで行われたのである。このサイクルには村総出の虫送りの行事も含まれていた。

作期の短い改良種稲の導入は、このサイクルを壊すことになった。人々が思い通りのスケジュールで稲作開始期を決めるようになったからである。その結果、稲作は大打撃を受ける。減水期稲の作期が遅れた人は、稲が実をつける頃に田が洪水に襲われ、収穫のほとんどを失った。一方、灌漑施設が欠如していることもあって、乾地の稲作は依然として雨頼みであった。さらに悪いことには、稲が順調に実を付けた田であっても、収穫前に鼠害やバッタ害に遭うものがほとんどだった。というのも、極端に言えば、作期を遅えた稲作地が1年をつうじてコトダラムに存在するようになり、鼠、バッタは、稲が実を付けた田を順次襲うことができたからである。これを防ぐ手段は、おそらく稲作開始期をコトダラム全体で再統一することであったが、すでに7つの行政村に分かれて数年を経た時点では、コトダラム全体で意思統一をすることは難しく、これが実現されるとは思えなかった。このように、1984年にみたコトダラムは、経済的にも精神的にも低迷した状況にあった。

上のような印象を携えて日本に戻ったわたしは、1988年に「失われた好機：リアウ州、クアンタンのミナンカバウ村の社会史」という論文を英文でまとめ、これは1990年に出版された[Kato 1990]。論文は「開発の社会・文化的衝撃」と題する国際会議のために準備されたもので、オランダ時代の小農ゴム栽培による変化と、スハルト体制下のゴム再植プロジェクトの結果を例に、コトダラムにおける開発の体験を論じたものである。

オランダ時代のコトダラムは、1920年代後半と30年代後半の2度にわたりゴム・ブームを経験した。この時期、多くの現金が流入したにもかかわらず、それが経済的再生産のために使用されることは稀であった。主として豪華な結婚式、家の新築、洋式家具の購入、メッカへの巡礼などのために使われ、子供の教育やゴム園の拡大・再植のために投資されることは少なかったのである。スハルト期のゴム園再植プロジェクトが直面したゾウ被害に基づく問題については、すでに述べたとおりである。ゴム・ブームをきっかけにするにしろ、政府援助プロジェクトをきっかけにするにしろ、自立的開発の好機を逃してしまった、現在も逃しつつある、というのが、「失われた好機」の論旨であった。こうした歴史的再構築をもとに、村の現状だけではなく、村の将来についても、暗い見通しを立てたことになる。

プキティンギで開催された国際会議で論文を発表したあと、コトダラムを5日間だけ訪問した。そこでみたコトダラムは、「失われた好機」が予測したものとはまったく異なる村であった。1980年に再植されたゴム園の一部はゾウの被害を免れ、80年代の半ばにはゴム液を産出するようになった。従来のゴム樹と異なり、改良種は樹皮が薄く、皮をナイフで切ってゴム液を採取するのがはるかに容易だった。また、ゴム液の産出量も従来のゴム樹より格段と多かった。

これに加えて、1986年頃から、村におけるゴムの買取り価格が84年時のその4倍に跳ね上がった。一説によると、HIV/AIDSの拡散により、世界的に天然ゴムの需要が増大したためだという。コンドームや医療手術用のゴム手袋には、合成ゴムではなく天然ゴムの方がより適しているのだと、あとで知ることとなった。4年前には村に2台ほどしかなかったオートバイが、88年には20台近くになっていた。

これらすべての結果として、村人の間に老齢化したゴム園の再植を望む人が増えただけでなく、ゾウの被害を防ぐために再植地に泊まり、夜番をすることが一般化した。経済的に余裕のある人の間では、土地、苗木、肥料などを用意し、再植のための労働と再植後のゴム園の管理を人に任せることが一般化しつつあった。再植3、4年後、ゴム園は資本提供者と労働力提供者の間で折半されるのである。

稲作についてはどうかというと、1986年、コトダラム出身でリアウ州の州都パカンバルに住むエリートたちにより、稲作期をコトダラム全体で同じくするための「行政指導」が発揮された。パカンバル在住のエリートは主として公務員で、教育程度も高く、村人には一目置かれる存在だった。政府組織ゴルカルの支持においても利害を同じくする人達であり、1980年代初頭以来、スカルノ時代にはイスラーム政党の強かったコトダラムにおいて、総選挙でゴルカルに勝たせようと腐心していた。1987年は5年毎の総選挙の年にあたり、行政指導を発揮した裏には、村の経済問題を軽減ないし解決することにより、選挙におけるゴルカル票を伸ばせるとの思惑が込められていた。行政指導には、鼠害やバッタ害に弱い改良種稲ではなく、在来種稲を再導入し、1年1毛作に戻すことも含まれていた。エリートたちの指示が適切であったのか、その後、鼠害やバッタ害は低減し、稲の収穫は満足のいくものであった。つまり、ゴム栽培の面からも稲作の面からも、1988年にみたコトダラムは、1984年にみたコトダラムとはまったく様相を異にする村だったのである。

上の乖離に直面したのが、「失われた好機」を発表した直後のことだっただけに、その衝撃は大きなものがあつた。論文におけるコトダラムの歴史の再構築が、1984年という現在にいかに関与を受けていたかを痛感させられたのである。この意味で、定点継続フィールドワークは、重層的かつ時間差をもつ「現在」から時間をさかのぼり、さらに何年にもわたっているいろいろな村人と話をするにより、多元的、多声的で、より厚みのある歴史の再構築を可能にするものだと考えている。

6. 地域の歴史を描く

「スマトラの村の20世紀」は、リアウ州の人口3000ほどのひとつの村とのかかわりである。それも20年という長い時間をひと区切りとしてののかかわりである。コトダラムという村には、知り合いの出身村という以外、とくべつな特徴があるわけではない。このような村とのかかわ

りから、一体ながみえてくるというのだろうか。コトダラムがみえてくるだけだ、ということなのかもしれない。それもよし、と思う。しかし、コトダラムに密着し、コトダラムという覗き窓をとおして、地域を、日本を、世界を、そして自分をもみることができるのではないかと期待している。

「スマトラの村の20世紀」における中心的関心事は、当然のことながら歴史である。歴史を考えるにあたっては、ふたつのことを心がけている。ひとつは、歴史の考察は衣食住などの村人の生活側面のごく卑近で具体的な変化から出発すること、生業活動の変化ならびにそれに連動する生態環境の変化を考察の柱のひとつにすること、そして家族関係、権力関係、心性・精神史といったより抽象的な局面の変化は、こうした具体的な変化の理解のうえに積み上げていくこと、である。もうひとつは、村でみるものは、本質的に存在するものとして認識するのではなく、変化の履歴を内包したものとして理解することである。たとえば、結婚式のやり方や花嫁・花婿の衣装をとってみても、村人が伝統的だと説明するにもかかわらず、具体的に聞いていくと、貨幣経済の浸透と新たな物質文化の到来により、この7、80年の間に大きく変わってきたことがわかる。これは、日本の結婚式、披露宴の変化を念頭におけば容易に想像できるだろう。

定点継続フィールドワークにおいてもうひとつ心しているのは、コトダラム村は真空のなかに存在するのではなく、より大きな地域的コンテクストのなかに存在するという認識である。村は何層にも重なる地域—クアンタン地方、インドラギリ・フル県、リアウ州、ミナンカバウ文化圏、スマトラ島、インドネシア、マレー世界、東南アジア等々のなかに位置づけられる。コトダラム村の社会過程を理解するには、村内の変化だけではなく、村とこれら地域との関係史にも注意を払わなければならない。

コトダラムを取り囲む重層的な地域は、たんなる地理的構築物ではない。それ自体が歴史的・文化的構築物である。現在のリアウ州は、1958年以前には地域としては存在しなかった。また、クアンタンは、元来、西スマトラのミナンカバウ社会との歴史的・文化的関係のなかで意味のあった地域であり、スハルト体制下のリアウ州では、当のクアンタン地方において、「クアンタン」そのものが地域としての意味を低下させてきた。というのも、スハルト期のリアウ州の官製民族アイデンティティはムラユ (Melayu) であり、リアウ州でミナンカバウ・アイデンティティに固執することは政治的に得策ではないからである。⁴⁾

村と地域との関係史を考える作業のなかで重視しているのが、交通通信手段の発達、人・モノ・カネ・情報の周流、大きくは国家政策や国際経済の動向、などである。たとえば、19世紀末・20世紀初頭から、村の人がマレー半島や南シナ海南端のプラウ・トゥジュ (Pulau

4) この点については、Kato [1997] で詳しく論じた。

Tujuh) 諸島に出稼ぎに出るようになるが、これは蒸気船の普及、持ち運び可能な貨幣の一般化を前提として、はじめて可能となったものである。それ以前の人口移動は、出稼ぎではなく、移住が中心だった。交通の便が悪く、持ち運び不能な土地が主たる富の源泉であった時代には、出稼ぎは現実的ではなかった。現代についていえば、政府の開発政策の動向を考えずして、村の変化を語ることはできない。

わたしが地域研究という言葉をはじめて聞いてから、もう30年以上が過ぎようとしている。この言葉は当時とは比較にならないほど、現在、日本で定着している。地域研究とはなにかについて、研究者の間で必ずしも意見の一致があるわけではない。しかし、地域の固有性への着目、総合的理解、学際的アプローチ、フィールドワークの重視、これらが地域研究の一般的特徴であることに、おおかたの異存はないであろう。

現時点でのわたし流の地域研究実践においては、定点継続フィールドワークが中心的な位置を占めている。歴史と地域、時間と空間へのこだわり、さらには両者の相互作用へのこだわり、つまり地域の歴史を描くことにこだわっているのである。学際的アプローチについてはどうかというと、チーム学際ではなくワン・マン学際である。当然、1人で取り組むことのできる学問分野は限られており、どこかに軸足を定めざるをえない。わたしの場合、それは3本足で、人類学、歴史学、社会心理学ということになる。社会的事象、文化的事象を中心に据えながら、人々の考え方や心性をも研究関心の射程に収め、村落でのフィールドワークをもとに「地域」を歴史的に捉えてみたい、ということである。

このような研究姿勢のもとで、どこまで地域の固有性を析出できるのか、わたしには確たる見通しはない。そもそも、固有性の存在を先験的に措定できるとは思わないし、また、固有性への着目は、普遍性の存在を否定するものでもないと考えている。いずれにしても、「スマトラの村の20世紀」が、コトダラム村の20世紀にとどまらず、いずれは日本の20世紀を考える道筋をも示してくれるだろうと期待している。固有性と普遍性は背中合わせのもの、あるいはコインの裏表に思えるからである。

「スマトラの村の20世紀」を「プロジェクト」として意識し始めたのは、現実にはそれほど古いことではない。それは、1996年に上辞した紀行文の執筆過程であった[加藤 1996]。コトダラムとのかかわりに、自分は一体なにを求めているのだろうと考えた末の結論である。定点継続フィールドワークがはたしてなにを生み出すのか、すべてはこれからの営為にかかっている。その方向へ向けての努力は、ようやく緒についたばかりである[加藤 1999]。

参 照 文 献

- Kato, Tsuyoshi. 1984. Typology of Cultural and Ecological Diversity in Riau, Sumatra. In Narifumi Maeda and Mattulada, eds., *Transformation of the Agricultural Landscape in Indonesia*. Kyoto: Center for Southeast Asian

Studies, pp. 3-60.

_____. 1990. Opportunities Missed: A Social History of a Minangkabau Village in Kuantan, Riau. In Abdul Aziz Saleh and D. Flud van Giffen, eds., *Socio-Cultural Impacts of Development: Voice from the Field*. Padang: Andalas University Research Center, pp. 56-79.

_____. 1997. The Localization of Kuantan in Indonesia: From Minangkabau Frontier to Riau Administrative District, *Bijdragen tot de Taal-, Land- en Volkenkunde* 153(4): 737-763.

加藤 剛. 1996. 『時間の旅, 空間の旅—インドネシア未完成紀行』 めこん.

_____. 1999. 『『開発』という体験—スマトラの村の歴史から』 足立 明編『開発言説と農村開発—スリランカ, インドネシア, タイの事例研究』 文部省国際学術研究研究成果報告書, 137-195.